



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

この一本

女が自分のどこにコンプレックスを抱くかご存知だろうか？「足が太い」これはかなりの確率でどの女性も持つてるかもしれない。「最近太った」これもある。しかし何りよも日本人が多く抱えてるのは顔である。「眉が薄い」と歎いてる女性のなんと多いことか、もともと東洋人なので濃いわけがないのだが、ともかくバツグに絶対眉ペンだけは入れてる人は男性の想像をはるかに越える量だろう。

「すっぴんを見られるのは全然かまわないんです。でも眉だけはダメ！」
と言って、お風呂に入ったあとでも、わざわざ眉だけは描く人なんて

ざらにいる。私自身がそのうちの一人である。家に居る時まで描く人もいるが、私の場合はそこまでひどくはない。しかし、仕事で外泊した時なんかは、夜お風呂に入った後でまた集まるといような場合には、眉だけは描く。なんか落ち着かないというのが本音だろうか。

それからまつ毛。これに対するコンプレックスも多い。「まつ毛が伸びる、太くなる」というようなキャッチコピーでマスカラが売られているのも無理はない。ともかく東洋人はまつ毛が細く、薄い。外国人のよくなまつ毛ザワザワ、お目目パッチリに憧れてもどうしようもないという時代が長く続いたのである。

60年〜70年代に流行ったつけまつ毛がいい例だ。マスカラが発達してなかった当時はつけまつ毛に頼るしかなかった。そうすると、どうしてもくつきりしたまつ毛のラインが目の上につく事になるので、その上からまたアイライナーでべったり線を引かねばならず、ケバケバしい化粧にならざるを得なかった。

それが、かのランコムが開発したマスカラのおかげで、自分のまつ毛に繊維を乗せていって長く伸ばすという新技が登場したのである。

「おお。私のまつ毛が長くなっていく！」

世の中の女性は狂喜乱舞した。今までに見た事もないまつ毛が長くて濃い自分。これは画期的な商品だったのだ。

ご存知のように、その後マスカラ業界はこぞって繊維の入った自分のまつ毛が長くなる新製品を、次々と売り出したのである。

今日の写真はその下地用のマスカラだ。繊維の入ったマスカラなんてもう当たり前になっている今はマスカラにも下地、トップコートなどが存在する。この一本をまず自分のまつ毛につけると、糊状の液体がまつ毛に絡む。要するに一本一本が太く、長くコートされていくのである。

その上にマスカラをつけると、糊に色をつけてるようなものだから色落ちもしないということである。私は先日、これがあるテレビ局のヘア

メイクさんにしてもらって、自分のまつ毛が育つ過程に感動してしまっ
た。

そんなわけで今、気になって凝ってるのは「まつ毛化粧」なのだ。

この話について来れなかった男性はご心配なく。女は自分の顔にプラ
モデルを組み立てているような感覚で遊んでいるのである。まつ毛に糊
をつけて色を入れる。そんな細かい仕事が楽しいだけで、けっしてそれ
で自分を見失っているわけではないので！

リリパット・アーミーⅡ 第41回公演

「ちやちやちやある洋服職人の物語」

3月6日(土) ～ 3月14日(日) 東京・下北沢 本多劇場

詳しくは玉造小劇場ホームページへ

↑↑クリック↑↑

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
